心通わせる風を吹かせたい
――ピースウォーク京都の活動――

上杉 進也

私たちは「ピースウォーク京都」です。私たちは、01年9月11日の事件が起こり、やがてアメリカが「報復」を叫んでアフガニスタン空襲を始めたときに、じっとしていることができなくなった何人かの呼びかけで生まれました。「殺さないで。今こそ平和を！」という願いを表したい人が、誰でも、1人でも参加できる場を作ろうと、思いに沿った表現を探しながら、町を歩き始めました。それからもう5年近くになります。

今年3月19日のピースウォーク、三条通り

私たちの行動は、2～3ヵ月に1回ぐらい、ピースウォークを行なうことが中心です。ウォークにはいろいろな表現の仕方がありますが、私たちは平和の気持ちを伝えることに心を留め、その都度いろいろな意見を取り入れた表現を行なってきました。

とくに私たちは私たちの思いをできるだけ丁寧に伝えるチラシを作ることに力を入れています。ミーティングで文案を決めてからメーリングリスト上でみんなの意見を繰り返し入れて文章を練り上げていきます。時間がかかりますがウォークへの大切な準備です。学生さんや若い画家さんの助けを借りてイラストを入れたり、風刺画を入れたり、ときには参加者の声を入れたり、そのつど違うものを作ってきました。チラシは京都の街中の数十の喫茶店、商店、画廊、公共スペースなどに毎回置いてもらっています。いろいろな企画での配布はもちろん、郵送やポスティングなどで、たくさんのチラシをみなさんにお届けしています。

ウォークにも工夫を凝らしてきました。日韓の若い芸術家たちが集っている「オツケともだち」の力を借りて、ウォークの前にみんなでゲルニカの絵を描いてそれを持って移動したり、平和の思いを紙飛行機にこめようと、たくさんの紙飛行機を折ってから歩いたりしました。またイラクの惨状を伝える写真パネルを参加者が持って「動く写真館ウォーク」を行なったり、チャンゴやドラムなど鳴り物を用意して陽気に踊ったりもしました。

ウォークの前には1時間ほどのリレートークを行ないます。それぞれの発話を大事にしたいので全く自由に発言していただいていますが、毎回、素晴らしい話が出てきます。昨年の11月には市内在住の荒井さんという方が、6歳のときに横浜空襲にあった話をして下さいました。今になって初めて話されるお話でした。荒井さんはこのときにお父さまを亡くされています。燃え盛る火の中を母の背に負われて逃げた荒井さんには、空襲への恐怖が強いトラウマとなって残ったそうです。その発言は参加者の胸をゆさぶりました。私たちはその内容を今年のイラク開戦3年目の日のウォークを呼びかけるチラシに掲載しました。

このようにして歩くだけではなく、アフガニスタン戦争の開戦から1年、2年と経った日、あるいは昨年8月の広島原爆被爆60年の日には、ビジル（夜伽）というキャンドルとプラカードを持ってただ静かに町に立つサイレントアピールも行なっています。

京都には留学や就労、観光など、いろいろな理由で世界から人びとが集まっているので、企画にむけてはできるだけ英語のチラシも作り、参加を呼びかけるようにしています。忘れられないのは、イ

ラク開戦直前のウォークのときのこと。リレートークで英語の通訳も行ないましたが、司会者が「みなさん、どちらから来ましたか？」と問いかけると、「カナダ」「中国」「ドイツ」「オーストラリア」……と10ヵ国以上の人がそれぞれに手を振って答えてくれて、そのたびに会場が拍手に包まれました。（あとで「声をあげられなかったけれど」と自己紹介してくれたアラブの国ぐにからの方もいました）。ウォークのときもそれぞれのお国ふうのアピールやシュプレヒコールがこだまし、ウォークの前と真ん中と後ろでまったく違ったパフォーマンスが行なわれていました。たくさんの要素が混じりあったこのようなあり方を私たちはこれからも大切にしていきたいと思っています。

私たちは、その他にアフガニスタンで医療活動を続けているペシャワール会の中村哲医師を毎年、京都にお招きして講演していただいています。人気のある中村さんの講演には初回に2000人の参加者が集まりました。会場選びが大変でしたが、京都ノートルダム女子大学の好意を得ることができ、以来、毎回同じ場所で講演会を行なっています。

講演会は他にも繰り返し行なっています。アメリカがイラクに戦争をしかけ始めたときは、イラクの現状を知ろうと、「アラブの子どもと仲良くする会」の伊藤政子さんをお招きしました。劣化ウラン弾の被害を受けたイラクの子どもたちの哀しい姿に胸が潰れる思いがしましたが、それをできるだけ広めていこうと、参加者の経営する画廊をお借りして写真展を行なったり、ウォークのときにたくさんの写真を持ったりしました。04年には元アメリカ兵で自分もウランによって被爆したケン・オキーフさんを京都に招いてお話を聞き、昨年はイラクを精力的に取材している写真家の豊田直巳さんに来ていただきました。

京都に講演していただく方をお招きしたときには、できるだけおもてなしをすることも私たちは大切なことだと考えています。自ら被爆しているケンさんを招いたときは、哲学の道にある法然院というお寺の一室を借り、参加者のお茶の師匠さんに静かなふるまいのひと時を演出していただきました。ケンはさんはため息と共にpeacefulと語ってくれました。

そんな私たちの行動が凝縮したのが今年2月に行なわれた本多立太郎さんの戦争出前噺です。本多さんは自らの戦争体験を1100回以上も語られてきて、今年の2月で最後の講演を終えられましたが、その京都での最後のお話をやはり法然院にお招きして行なっていただきました。本多さんのお話は、戦争における別れと死をテーマにしていますが、出征前のお別れのときに、心通わせる娘さんが、ボレロを繰り返しかけてくれたことが出てきます。それをあらかじめ伝え聞いた私たちは、当日の講演のあとに、参加者の高校生を中心にチェロとバイオリン、クラリネットを重ねたボレロの生演奏を本多さんにプレゼントしました。100人収容の部屋に200人が詰めかけて下さいましたが、みんなで平和の大切さをしみじみと味わう場を作れたのではないかと思っています。**（左写真）**

世の中では相変わらず戦争が続いています。弱肉強食の風潮もますます強まり、人びとの心に暗い影をなげかけています。そんなときだからせめて私たちの側からは、人と人が慈しみあい、心を通わせていく風を吹かせていきたい。そう考えて私たちはこれからも小さな歩みを重ねていきます。私たちに発言の場を下さってどうもありがとうございました。

（06・03・21記）

（うえすぎ・しんや、「ピースウォーク京都」参加者）